関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター研究報告（10）

Research Note of Region, Town and Environment Policy Studies Center (10)

関根 孝道[1]・益田 博[2]
Takamichi Sekine and Hiroshi Masuda

第1　はじめに

今回は研究センター第10回目の記念すべき研究報告となった。掲載するのは本稿一本のみである。前回と同様に寂しい気がする。前号の予告編では複数の報告をしたいと意気込んだが果たせなかった。研究成果ゼロよりはマシと開き直るほかはない。

今回紹介するのは本稿で第4作目となる益田博の論稿である。個人的には、千刈キャンプを「関学の森」とし、ここで総合政策学部らしい実践的な教育ができればと思っていた。益田は、前三回の連載を通じて、千刈キャンプの魅力を説き、在学生の環境教育の場としての利用可能性を明らかにした。今回は、その実証報告ともいえるもので、実際に、(財)日本自然保護協会の自然観察会を千刈キャンプで実行し、プロの団体による自然観察指導員の養成現場として使用できるか試してみた成果報告である。幸い、千刈キャンプは高い評価を得て、自然観察指導員という今後各地で自然観察のリーダーとなる要員養成の場としても利用可能であることが分かった。同時に、千刈キャンプの外部利用を促進する上での課題も見えてきた。詳細は益田の原稿を読んでもらいたい。「灯台もと暗し」というか、我々には千刈キャンプは近すぎて価値が見えにくい。今回、千刈キャンプの実力が外部の最高レベルの目利きによっても評価された。今後は、「宝の持ち腐れ」としないように、学内の教育にも一層活用できればと思う。

第2　千刈キャンプの学外利用の可能性
～自然観察指導員の養成現場として

はじめに

1．本稿の目的

千刈キャンプは、国内における大学の付属機関としてユニークな特徴を備えた施設であるが、残念ながら学内での認知度が低い。この劣勢を挽回するべく、これまでも「総合政策研究」誌上３回にわたり、その概要や現状を中心に報告を行なってきた。本稿では、先般開催した「NACS-J 自然観察指導員講習会」のレポートを中心に、自然体験活動や自然観察的な環境教育の場としての千刈キャンプの可能性について考えてみたい。

2．「第458回　NACS-J　自然観察指導員講習会」の概要

(1) 自然観察指導員講習会とは

日本自然保護協会[3]では、1978年より、地域で

1　関西学院大学地域・まち・環境総合政策研究センター長。
2　関西学院千刈キャンプ主任。本学総合政策研究科前期課程修了生。
3　公益財団法人日本自然保護協会（NACS-Jは英名の頭文字から）　〒104-0033　東京都中央区新川1-16-10　TEL 03-3553-4105（教育普及部）
http://www.nacsj.or.jp

の身近な自然への関心を深め、地域の生物多様性保全と持続的な地域づくりを促進するための観察会を企画運営できる指導ボランティアを育成することを目的に、自然観察指導員講習会を開いている。「自然かんさつからはじまる自然保護」をモットーとするこの講習を修了し登録された指導員数は2万5千人を超えている。千刈キャンプは今回初めて講習会の開催を誘致し、日本自然保護協会との共催で実施した。

写真1　名前を覚える会ではない

(2) 日本自然保護協会とは

尾瀬ヶ原湿原を水没させる発電ダム計画への反対運動のため結成された(1949年)尾瀬保存期成同盟を前身とし、1951年、日本最初の自然保護団体として誕生した。以来、尾瀬、知床、白神山地など日本を代表する自然をはじめ、各地の森、里山、川、海辺の生態系や野生動植物の生息・生育地など、幅広い自然保護活動に取り組んでいる。

活動の特徴は、自然を楽しみながら知って、自然を調べ守る力や守った自然をもっとよくする力につなげていくこと。自然を調査研究してその保護の大切さを明らかにし、野生生物の生息及び生育環境の保護、自然資源の持続、生物多様性の保全等広く自然保護に努めるとともに、人々の認識を深める様々な事業を通して、自然環境の保全に貢献することを目的とする団体である。

(3) 講習会の実施概要

とき　2011年10月21日(金)～10月23日(日)

ところ　関西学院千刈キャンプ

講師　足立 高行：NACS-J理事／大分県自然観察連絡協議会前代表／応用生態技術研究所所長／技術士(環境部門)／NPO法人おおいた生物多様性保全センター理事長／星野 由美子：島根県立三瓶自然館サヒメル主任研究員／島根県自然観察指導員連絡協議会／しまね環境学習サポートネットワーク

福田 博一：公益財団法人 日本自然保護協会 教育普及部

以上の講師に加え、地元講師3人が地域の自然文化についての解説を行った。

参加者　29人(男性17人女性12人)／兵庫県20人、岡山県2人、滋賀県1人、和歌山県1人、香川県1人、岐阜県1人、長野県1人、埼玉県1人、東京都1人

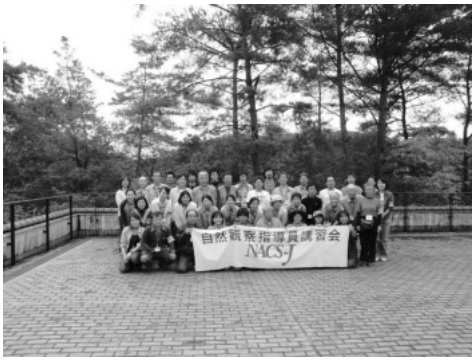

写真2　規模は小さいが中味の濃い講習会

【主なカリキュラム】

（基本は日帰り講習。夜はフリー）

10月 21日	午前	【野外実習①】3時間 「森を通して自然の仕組みを見にいこう」 自然のしくみや見方を学ぶ
	午後	【室内講義①】3時間 「自然の保護を考えよう」 自然保護の考え方や意義を学ぶ
	夜	交流会
10月 22日	午前	【野外実習②】3時間 「地域の自然を理解しよう」 地域を構成している要素を知る
	午後	【野外実習③】3時間 「自然観察のテーマ探し」 視点や手法を学ぶ
		【室内講義②】自然観察の役割や方法を学ぶ
10月 23日	午前	【個別野外実習④】2時間 「テーマ探しとプログラムづくり」 参加者各自で実習指導の準備とリハーサル
		【野外指導実習⑤】3時間 「実際に自然観察会をしてみよう」 自分でテーマを探し、5分間の自然観察会を企画運営する
	午後	まとめと閉講式

写真3　講師のリードで観察会の体験

写真4　ミニ観察会実施が講習会のヤマ場（指導者役を順番に体験）

写真5　地元講師の具体的なガイドに聞き入る参加者

参加者は生物の研究を続ける教員や現役大学生、仕事やボランティアとして自然環境の解説や案内、自然保護活動に携わる人などが集まった。

定員60人に対して30人を下回る参加者数となったため、収支面では正直厳しい結果となったが、講師やスタッフを含め、一人ひとりの交流が深めることができた講習会となった。

(4) 講師は千刈キャンプをどう評価したのか。

参加者間や運営スタッフとの交流を目的に、初日の夕食後開かれた交流会で、メイン講師の一人、足立高行氏と少し話すことができた。足立さんは地元の九州で生物多様性保全のためのＮＰＯ法人の代表も務め、公私共に自然環境の保全活動で全国各地を飛び回っている。

千刈キャンプのあり方に関して助言を求めたところ次のような答えが返ってきた。

写真6　雨を活かした観察会運営も大切なスキル（中央が足立氏）

「千刈キャンプは、自然体験活動を行なう宿泊施設としては、必要にして十分なレベルのようだ。あとは、この環境を活かしたメニューを出来るだけ多く用意することが、より魅力ある施設になるために必要だ。そのための様々なノウハウ・ネタ本はたくさんあるが、そのまま使うのではなく、それらを参考にして、是非千刈キャンプオリジナルを創ってほしい」

「三田や西谷（宝塚）に伝わる生活の技、お祭りや四季折々のお菓子などを、関学生や街の人が体験できるような機会、あるいは記録していくことも大切ではないか。地域に残っている若い世代が少なくなった今は、暮らしに関するあらゆることがいわば文化的な絶滅危惧種ともいえる」

「関学なりの経緯があって、今の千刈キャンプの森の様子となっていると思うが、どこかにこの地域の本来の植生を残してみてはどうか。それは教育機関としても重要な働きだと思う」

3. 講習会開催を通じて改めて感じた千刈キャンプの良さ

○適度な近さ

最寄り駅のJR三田駅からバスなら30分ほどで、タクシーなら15分ほどで千刈キャンプに到着する。市街地からわずかな時間で入ることができるというのは大きなメリットでもある。しかし、同時にバス便が1日平日で5往復、土日祝日に至っては午前3往復しかなく、車を持たない人にとって、千刈キャンプが経済的・心理的に遠い場所となっているのは、とても残念なことである。

○適度な自然

隣接する県道よりも高台に位置するため、車窓からでは敷地の全貌を知ることは出来ない。今回の講習会でも場所は以前から知っていたが初めて場内に入ったという人たちがほとんどで、一様に、敷地の大きさや森の様子に驚いていた。千刈キャンプは人の手が加え続けられた部分と、手付かずの（つまり放置されてきた）部分が混在している。大自然でもなく、また簡単には入れないほど荒れ果てたヤブ山でもない。コトバとして適切かどうかは別であるが、ほどほどに整備された森である。まったくの野生ではないが、森林公園ほど整ってはいないため、街から見ると十分に自然の中と感じる人がほとんどである。

また施設のすぐ外には、神戸市の水源でもある千刈ダムやそこに流れ込む羽束川があり、森だけでなく水の環境学習の場としても適した場所でもある。

○適度な文化的孤島環境

携帯電話の電波状況は改善されつつあるが、つながる場所は限られている。また、ラウンジをのぞけば新聞テレビもない。さらには徒歩圏内にコンビニなどもなく、いったん千刈キャンプに入ってしまえば、普段の暮らしから簡単に隔離されてしまう。

○様々な空間

樹木に囲まれた空間だけでなく、人が集う場

はログキャビンから快適なラウンジまで様々にあり、また研修室は100人ぐらいまでであれば十分に対応できる広さや設備を持っている。

写真7　センター棟の玄関も研修室となる

○配慮された食事

今回の講習会で参加者からは、「会場の設備がよく整っていて良かったです。特に食事がおいしかったです」をはじめとして、食事に関するコメントが多く寄せられた。

千刈キャンプの食事は今回も高く評価された。教育施設という枠組みの中ではあるが、宿泊施設の大きな魅力である食事の質が高いという強みをこれからも活かさねばならない。

写真8　一般の利用客も満足させられる質の高い食事が千刈キャンプのウリの一つ

4. これからの千刈キャンプに必要なもの「さらなる柔軟性と専門性」

最後に、無いものねだりではなく、既にあるものを活かす視点が現実的ではあるのを承知の上で、現場で感じる不足点をあげてみよう。

例えば時間管理。研修に限らず、計画していたプログラムは時間通りに進まない。予想外の展開も想定したスケジュールをたて時間を管理していくのが、企画運営者の腕の見せ所でもあるのだが、千刈キャンプの利用団体を見ていても、活動の区切りが食事や入浴などの設定時間帯にずれ込み、あわてて駆け込んでくることも珍しいことではない。

これを施設側の立場で見れば、「時間を守ってもらわなければ困ります」となるのだが、一方で利用者の立場なら、「多少時間を延長してもこのまま続けたい」という状況も多い。屋外の体験プログラムなどであればなおさら時間の管理は難しいものとなる。

時間管理に限らず、施設運営上あるいは他の利用団体のプログラムとの兼ね合いで、守っていただかないと困るルールや使い方など一定の譲れない線はあるが、各団体がその利用目的を達成できるよう施設側が柔軟な体制をとることが重要である。

そして、専門性を備えたプログラムスタッフの存在。現状、利用者へのサービスは大学生スタッフ(クラブ活動の一環)が担っており、それはまた歴史的に、千刈キャンプの重要な要素となっている。しかし一方で、例えば自然体験活動や環境教育のフィールドとしてより高い機能を千刈キャンプが提供していこうとすると、学外の一般利用客はもちろん学内向けにであっても、専門性の高いプログラムサービスが必要となる。しかし、クラブのホームベースとして千刈キャンプを使い活動する現有の大学生スタッフに新たな専門性を求め

ていくには自ずと限界がある。

写真9　このような体験が是非カリキュラム化されてほしいものだ

高い専門性を備えた人材をどこに求めていくのかについては、確たる方向性が決まっている段階ではない。大学生向けの指導者講習会などを通じて学内での人材育成に取り組み、プログラムスタッフのチームを作るのも一つの手段であろう。また、外部の専門組織と連携し、指導者を必要に応じて派遣してもらえるようなネットワーク作りも重要であろう。いずれにせよ、千刈キャンプが「森のキャンパス」として、「自然系」に限らずこれまで以上に付加価値の高い教育施設として活用されるためにも、「ヒト」という資源の獲得は最重要課題である。